第1章　マルクス主義経済学から見た乖離　68
——購入できる同種商品の量で通貨の「価値」を測る購買力平価
第2章　商品ごとの購買力平価の違いが示すもの　73
1、日中の商品ごとの購買力平価の違い　73
2、政府関係者の説明の誤り　75
3、日中の農産物の生産性の比較　77
4、商品の生産性と購買力平価の試算モデル　79
5、日中の工業製品の生産性の格差の歴史的変化　83
6、輸入原材料の購買力平価が市場レートに近いわけ　85
7、日本と同じ生産性をめざす日本の多国籍企業の中国製品　87
8、日米の商品ごとの購買力平価の違い　90
第3章　世銀の購買力平価の各国比較と時系列推移　93
1、乖離の各国比較から見えるもの　93
2、円とドルの乖離の時系列推移　97
3、先進工業国通貨の乖離の時系列推移の特徴　102
4、人民元とドルの乖離の時系列推移　105
5、途上国通貨の乖離の時系列推移の共通点　109
6、ドルに支配される途上国通貨　116
第三部　為替レートと購買力平価の乖離の原因と解決策……121
はじめに　123
第1章　インフレという要因　123
第2章　生産性の変動という要因　126
第3章　賃金の変動という要因　130
第4章　通貨の需要・供給という要因　132
第5章　異種通貨の交換という要因　135
第6章　投機という要因　139
第7章　資本進出という要因　145
第8章　二つの市場の参加者の顔ぶれ　152
第9章　乖離の原因のまとめ　155
第10章　乖離をどうするのか　159
1、乖離をなくすための諸方策　159
2、民主的な国際経済秩序への展望を開くために　163